

Title	近代日本における「読む」行為と人間形成： 明治後期から大正中期の女性を視点として
Sub Title	
Author	山梨, あや(Yamanashi, Aya)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.56 (2003.) ,p.139- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成14年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000056-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(先のアーティキュレーションの議論でいえば、これが要素にあたる)。またそれはどのような効果を持ち、ナショナル・アイデンティティの構築/再構築に影響しているのか、論証していきたい。分析の際には言説それ自体と同様に、あるいはそれ以上に、それら言説の消費のありようを追っていく必要があるだろう。言説＝イデオロギー分析の方法論の検討も含め、現在作業を進めている。

さらにそれとも関連した理論的な課題として、「母語」なるものについて語ることの困難が指摘されよう。とりわけ自らの母語で、母語について語ることの難しさとその意味はいかなるものなのか、という問いを念頭において分析を進める必要があると考える。

引用・参考文献

- Grossberg, Lawrence ed., 1996, "On postmodernism and articulation: An interview with Stuart Hall," Morley, David and Chen Kuan-Hsing eds., 1996, *Stuart Hall: Critical Dialogue in Cultural Studies*, Routledge. =1998, 甲斐聰訳「ポスト・モダニズムと節合について——ステュアート・ホールとのインタビュー」『現代思想』26(4): 22-43.
- Hall, Stuart, 1996, "Introduction: Who Needs 'Identity'?" Hall, Stuart and Paul du Gay eds., 1996, *Questions of Cultural Identity*, 1st edition, Sage Publication. =2001, 宇波彰訳「誰がアイデンティティを必要とするのか？」宇波 彰, 柿沼敏江, 佐復秀樹, 林 完枝, 松畑強訳『カルチュラル・アイデンティティの諸問題 (誰がアイデンティティを必要とするのか?)』大村書店: 7-35.
- , 1985, "Signification, Representation, Ideology: Althusser and the Post-Structuralist Debates," *Critical Studies in Mass Communication* 2(2): 91-114.
- 吉見俊哉, 2000, 『思考のフロンティア カルチュラル・スタディーズ』岩波書店.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

近代日本における「読む」行為と人間形成

—明治後期から大正中期の女性を視点として—

山 梨 あ や*

研究の概要

本研究の目的は近代日本における「読む」行為と人間形成の関連について、明治後期から大正中期の女性を視点として明らかにすることである。平成14年度は、社会教育の成立過程において人々の「読む」行為を組織化する理念と実態を、図書館の果たした役割に注目して検討する作業を行った。2002年10月5日に開催された日本社会教育学会においては、1908年(明治41)に開館した東京市立図書館を対象として、図書館業務に携わった今澤慈海の理念とその実践について報告した。以下、本年度の研究成果として上記学会発表の内容を要約する。

はじめに

本研究は社会教育成立期における図書館の実践を明らかにし、社会教育史における位置付けを検討することを目的としている。倉内史郎は『明治末期社会教育観の研究』において図書館事業が教育、人間

形成に及ばず影響を示唆し、社会教育史研究において図書館の位置づけを検討する必要性を指摘した。従来の社会教育史研究では、戦前期の図書館について「思想善導機関」としての役割が強調されている。しかしながらこの指摘は法制度や政策の検討を基調とするものが大部分であり、図書館の地域における実践を踏まえ、図書館の事業が社会教育史にどのように位置付けられるのかは十分に検討されているとはいえない。

一方図書館史の分野においては、社会教育政策と図書館における活動、活動を推進した人物の図書館論を併せて検討した研究蓄積がある。しかしながらこれらの研究は行政側と図書館員とを単純な対立図式で捉える傾向があり、それゆえに「住民に開かれた図書館を目指して努力し、実践した」東京市立図書館などの「ごく少数の例外」がなぜ存在しえたのかが不明である。このように社会教育史においては社会教育成立期の図書館を思想善導機関と位置づける一方で、図書館史においては東京市立図書館などを例に挙げながら思想善導への対抗的存在としての図書館を強調するという二項対立的な評価がなされてきた。これらの研究を踏まえ、以下では 1908 年の開館以降、公立図書館としては最も高い水準にある図書館として発展していた東京市立図書館における社会教育実践を明らかにし、社会教育史における位置づけを再検討する。

東京市立図書館設立の背景

東京市立図書館が設立された背景には、人々の文化的なものに対する要求の高まりと、「都市」の形成がある。日露戦争は人々の教育意識の向上をもたらし、文化産業を成立させた。特に東京では市電などの交通網の整備に伴い、巨大な都市が形成されつつあった。そのような中、東京市立図書館は東京市教育会の発案によって建設され、帝国図書館に次ぐ規模の図書館として発展した。これは館頭に就任した今澤慈海による図書館の機構改革や、図書館の運営と発展に理解を示した後藤新平市長によるバックアップ、東京の都市化や人々の生活形態の変化に対応した図書館運営のあり方が効果的に結びつき、機能したことによるものである。このことは全 20 館から成るすべての市立図書館が市電の駅のすぐ近くに設置され、山の手と下町にバランスよく分布していたことにも端的に示されている。

今澤慈海の図書館理念

『市立図書館と其事業』（以下『其事業』と略）は毎月一回発行された東京市立図書館（以下市立図書館と略）の館報であるが、これを分析することによって今澤の図書館理念が明らかにされた。第一の理念は図書館を「生涯的普遍的教育」の機関とするというものである。今澤は「真の文化的発達個人は能動的意志の展開によってのみなされる」という信念から、成人教育を視野に入れた児童へのはたらきかけを重視した。この理念は、児童室の設置や学校教育との連携などの実践に結びついていく。今澤の図書館理念としてもう一つ挙げられるのは、図書館を「利用者本位」のものとするところである。今澤は人々にとって図書館を利用し易いものとするべく、開架式の導入を提言した。市立図書館においては、人々の人気が高かった新聞雑誌室などで開架式が導入されることになった。

東京市立図書館における社会教育実践

今澤が図書館を「生涯的普遍的教育」機関とするために重視したのは児童に対する働きかけであった。今澤は貸し出しの手順を図解にして説明したり、成城小学校の要請に応じて、学級文庫編成のために児

童書をセットにして貸し出したりする他、児童を図書館に呼び込むためにお話の会を定期的に催している。さらに市立図書館では、幅広い層の人々が図書館を利用するよう、無料の館報の発行やデパートとタイアップした読書週間の宣伝など、東京という都市の性質を踏まえた積極的な広報活動を展開した。市内20箇所の図書館では、月に一回のペースで様々な講演会が開催され、人気を博している。これらの活動は、当時の人々の嗜好や時代風潮を踏まえた上で、図書館を幅広い層の人々が利用できる「生涯的普遍的教育」機関とすることを目指した実践であったといえる。

「利用者本位」の図書館理念に基づく実践としては、閲覧料の値下げや無料化、開館時間の延長、貸し出し方法の簡便化、「同盟貸付」と呼ばれる相互貸借サービスや館外帯出の導入などが挙げられる。これらは人々にとって利用し易く、また様々なニーズに応えることを目的としたものであった。各種サービスの導入は、閲覧者数の増加をもたらしている。市立図書館が「利用者本位」の図書館を目指して運営されていたことを最もよく象徴しているのが、関東大震災後の活動である。今澤は人々に「慰安」を与え、地震に関する情報提供を行うべく、臨時開館や臨時図書館閲覧所の設置を実施した。特に臨時図書館閲覧所は市電の時間に合わせて開館時間を延長したこともあり、多くの利用者を集めている。

このように市立図書館では今澤の図書館理念に基づき、地域に密着した積極的な実践が展開された。その一方で、今澤の図書館理念は啓蒙的要素が強く、選書権は図書館側にのみあると考えられていたことも明らかにされた。利用者を無前提に「何を読めばよいか分からない啓蒙されるべき存在」として捉え、「良書の提供」の名の下に本を選択して提供していくことは、一定の価値観を押し付ける危険性を孕むものである。このことは、人々の嗜好を踏まえながら、より深い位相での「思想善導」を目指す「民主的」な大正期の社会教育構想へと接続する可能性を示唆している。このような今澤の理念を踏まえた上で当時の社会教育の策定に携わっていた乗杉嘉寿と川本宇之介の図書館の位置づけを概観し、両者の関係を検討する。

官僚の社会教育構想における図書館—乗杉嘉寿と川本宇之介を中心に—

乗杉の構想において、図書館は国家を繁栄に導く自発的な人間を育成する社会教育の重要な機関と位置付けられていた。しかしながら図書館は国家の発展を第一目標として機能すべきものであり、個人の知識や文化的生活の向上は副次的なもののみなされている。また川本は乗杉と同様に図書館を社会教育実践の場として重視するとともに、「一生涯に亙る」教育の場、自由意志に基づく「自己教育」の場という位置づけを明確に打ち出していた。勿論、川本の図書館の位置づけも「思想善導」という枠組みに根ざしたものではあったが、個人の要求に応じた学習機会の提供や生涯的な教育機関の役割を目指しているという点では「民主的」志向を併せ持つものであったといえる。

乗杉と川本の図書館重視は構想にとどまらず、文部省図書館員教習所を設立するなど、専門職としての図書館員の養成を実現させた。この教習所では今澤も講師を勤めていたことから乗杉・川本と今澤の間には面識があり、川本に関しては東京市教育課に勤務していた関係から図書館理念に関して互いに影響するところがあったのではないかと考えられる。川本と今澤の図書館理念を比較してみると、図書館を「生涯的」な教育機関と位置づけている点において共通している。このような社会教育官僚の図書館の位置づけは、今澤の図書館理念や当時の文化的なものを志向する時代風潮と共振するものであり、それは東京市立図書館における実践が成功したことと無縁ではないだろう。つまり、今澤の東京市立図書館における実践が可能であったのは、乗杉や川本の図書館の位置づけに今澤の理念と通ずる「デモクラ

シ-的」な要素が存在する一方で、今澤の啓蒙的な図書館理念は、乗杉や川本の思想善導的な構想と結びつく可能性があったからだといえる。

考 察

本研究では図書館を「思想善導機関」、あるいは思想善導に対抗する「デモクラシー的」機関とする二項対立的な先行研究を踏まえて東京市立図書館における実践を検討した。その結果、市立図書館では今澤の図書館を「生涯的普遍的教育機関」、「利用者本位」のものとする理念に基づき様々な活動が展開されていたことが明らかにされた。これらの活動は当時の人々のニーズや文化的要求の高まりに応じようとするものであり、都市生活に密着して展開されたこともあって多くの人々に「読む」行為を普及させる役割を果たした。その一方で、今澤の理念は多分に啓蒙的な要素を内包し、「良書」の選択と提供という名の下に一定の価値観を利用者に押し付ける危険性を孕むものであったことも示された。

このことを踏まえて当時の社会教育官僚の図書館の位置づけを検討すると、図書館を自発的な学習の場、生涯にわたる教育の場とするという点において今澤の理念や実践に通ずるところがあった。また今澤の啓蒙的な図書館理念は、乗杉や川本の思想善導的な社会教育構想に接続する可能性があることも示唆された。

従って、図書館を「思想善導機関」あるいは「思想善導に対抗する、デモクラシー的」存在であるという単純な二項対立的評価を下すことが適切ではないことが示された。今後は「読む」行為を組織化する過程において「思想善導」とデモクラシーがどのような連続性を持ちながら実践されたのか、またそれは人間形成とどのような関連を持つものであるのかを検討する必要がある。そのためには、「読む」行為を実践した人々における「読む」行為の実態を明らかにすることが求められる。従来あまり検討されてこなかった女性における「読む」行為の実態を明らかにし、「読む」行為が人間形成とどのような関連をもつものであるのか、それは歴史的にどのように位置づけられるのかを明らかにしていくことが今後の研究課題である。

参考文献

- 倉内史郎『明治末期社会教育観の研究』『野間教育研究所紀要』第二〇輯、1961年所収。
石井 敦『日本近代公共図書館史の研究』日本図書館協会、1972年。
山口源治郎「草創期社会教育行政と公共図書館論—川本宇之介の公共図書館論をめぐって—」『公立図書館の思想と実践』森耕一追悼事業会、1993年、69-84頁。
奥泉和久「『市立図書館と其事業』の成立と展開」『図書館界』第52巻第3号、2000年、134-147頁。
是枝英子「大正デモクラシー時代の図書館」『専修人文論集』54、1994年、145-180頁。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程